

# ハイデ

イ  
(第十五回)

津田芳雄譯

ビュルツミおもてで口笛が鳴つた。ハイディは  
稻妻のやうに駆け出した。ペーテルをまん中にし  
て、山羊たちが岩を飛び降りて来た。ペーテルは  
ハイディを見るミ、びつくりしてもものも云はずに  
立ち止まつてしまつた。

「ペーテル、こんにちには」

ハイディは山羊の群に飛び込んで行つた。

「小つちやな白鳥ちゃん！ ちつちやな熊ちゃん！ わたしを覚えてゐて？」

たしかに山羊たちは覚えてゐた。うれしさうに  
頭をすりよせて来ては、大きな聲でのきを鳴らす  
のだつた。そしてハイディが順々に名前を呼ぶミ、  
てんでにあわてふためいて跳んで来て、ぐるりミ  
ハイディを取り圍んでしまつた。せつかちの「ひ  
わ」は、早くハイディのそばへ行かうと思つて、外

の二匹を跳び越して来た。はにかみやの小さな「ゆ  
き」までが、決然として「トルコ人」を突き退けて  
進み出るミ、「トルコ人」は「ゆき」の大膽さに呆れ  
ながらも、「わたしを覚えてゐるでせう」せいふや  
うに、髭をおつ立てて見せるのだつた。

ハイディはこのなつかしいお友達みんなに、又  
逢へたうれしさで、もう有頂天だつた。小つちや  
なかあいい「ゆき」を抱いてやつたり、騒々しい「ひ  
わ」の毛並みを撫でてやつたりしてゐるうちに、な  
つかしさうにすり寄つて来る山羊たちに押され  
て、たうさうペーテルの立つてゐる所まで来た。  
ペーテルはさつきからまだ呆れたままで、ぼかん  
ミ突つ立つてゐたのだつた。

「ペーテル、降りていらつしやいよ。まだ「こん  
にちは」も云つてくれないぢやないの」

ハイディは叫んだ。

「そんなら、ほんたうにハイディちゃんは歸つて来たんだね」

ペーテルはやつこものが云へるやうになり、大急ぎで駆け降りて来て、ハイディの差し出した手を握つた。するせんにいつも山の歸りに云つてゐた通りのこゝをもう訊ねてゐた。

「あした一緒に行く？」

「ううん、あしたはだめ。おばあさんここへ行かないやならないから。あさつては、大てい行くわ」

「かへつて来てうれしいなあ」

ペーテルの顔は、いちめん輝いた。

それから、ぼつぼつ山羊たちを連れて歸る支度をはじめたが、山羊たちははしやぎまはつてなかなか云ふこゝをきかず、せつかなだめたり吐つたりして、やつこ一ミ所に集めたかと思ふに、ハイディがおぢいさんの二匹の山羊の肩に手をかけて小舎の方へ歩き出せば、又してもぞろ／＼こその方へみんながついて行つてしまふので、ペーテルはほゞ手こずつてしまつた。ハイディが自分も二匹の山羊と一緒に小舎に這入つて戸を閉めてしまはなかつたなら、その晩はペーテルはいつ

になつても家に歸ることが出来なかつたかもしれない。

このさわがすんで、ハイディが家の中に這入つて見るに、ちやんこ寝臺が出来てゐた。こりたての、いいにほひのする枯草が、ふか／＼こ積み重ねてあり、新しいシートですみ／＼までくろんであつた。その夜ハイディはのび／＼こ心愉しくぐつすりこその中で寝た。おぢいさんは夜中に十べんも起き出して行つては、梯子をのぼつて、ハイディがすや／＼こ眠つてゐるか、寝苦しさを様子にしてゐないか、丸窓から射し込む月の光りが眩しすぎないやうにこ積み重ねておいた藁が、うまくちやんこなつてゐるか、なごこ細かく氣を使つてやるのだつた。けれどハイディは身動きもせず、すや／＼こ心地よく眠りつづけた。もう家ぢやをさまよひ歩く必要もなかつた。心の底からの燃えるやうなねがひが叶ひ、高い峯や岩が夕陽に眞赤に輝いてゐるこころも見たのだし、樅の木が風に枝をさやめかすのも聞いたのだし、そしてたうさう、お山のおうちに又歸つて来てゐるもの。

十四、日曜日の鐘の音

ハイディは風にゆれる樅の木の下に立つて、おぢいさんを待つてゐた。これから二人で、途中ちよつとおばあさんのところへ立ち寄り、それからデルフリの水車小屋へハイディの旅行かばんをさりに行くのである。ハイディはあの白い巻パンがさんなにおいしかつたかが早く聞きたくて、おばあさんに逢ひたくてたまらなかつた。でも、その待つてゐる間でも、ハイディは決して退屈しなかつた。樅の木の枝をゆするなつかしい音は、いくら聞いても聞き飽きなかつたし、あをい牧場を吹いて来る風の草のほひは、吸つても吸つても吸ひ切れないし、お日様に輝く金いろの花は、いくら見ても見飽きない氣がするのだつた。やがておぢいさんが出て来て、一さわたりあたりを見まはして、それから上機嫌でハイディを呼んだ。

「さあ、行かうぜ」

その日は土曜日で、おぢいさんが家の内外をすつかり大掃除する日だつた。おひるからハイディを連れて出かけられるやうに、その日は朝のうちすつと働いたので、そこいらぢうは、おぢいさんの氣のすむまで、ぴかぴか光つてゐた。

二人はおばあさんの小屋の前で別れた。ハイ

ディが駆け込んで行くミ、おばあさんはもう足音で知つてゐて、入口まで迎ひに来て、

「おお、ハイディちゃんだね。よく来てくれたねえ」

ミ、ハイディの手をさつて又何處か遠くへ連れて行かれはしまいかと恐れるもののやうに、しつかりと握りしめた。それから、白い巻パンがさんなにおいしかつたか、あれを食べてさんなに元氣が出て来たかを、うれしさうに述べ立てるのだつた。するミそばからペーテルのお母さんが引きさつて、こんな調子で一週間も食べられたら、ぐんぐん元氣を取り戻すのだけれぎ、おばあさんは白パンがなくなつてしまふのを心配して、一つしか食べないのだと云つた。ハイディはぢつと聞いてゐて、しばらく考へてゐたが、急によいこみを思ひ付いた。

「ああ、かうすればいいわ、あばあさん」

ハイディは一生懸命に云つた。

「わたし、クララにお手紙を書くわ。そしたら、あれがおんなじ位、又送つて下さつてよ。だつて、せんにわたし、ミつてもミつさりたんすの中に貯めておいたのですもの。ロツテンマイアさんがみ

んな乗てゝしまつた時、クララはあれおんなじだけ、きつこ返してあげるつてお約束したのよ。だから、きつこ大丈夫よ」

「それは結構だけど、でも一さきにきつさり送つてもらつたんぢや、硬くなつてしまふよ。デルフリのパン屋にも白パンがあるのだけれど、さうも高くつてねえ」

お母さんが云つた。

するこ、もつこくうれしい考へが、ハイディの頭に浮んだ。ハイディは部屋ぢうを跳んであるきながら叫んだ。

「ああ、わたし、きつさりお金持つてるのよ、おばあさん。今やつこその使ひ道がわかつたわ。おばあさんは毎日、柔い新しい白パンを、一つづゝ買ふのよ。日曜日には特別二つね。ペーテルがデルフリまでお使ひに行けばいいわ」

「飛んでもない、そんなにまでしてもらつてはすまないよ。そのお金は、そんなこをやる爲めにいただいたんぢやないんだよ。おぢいさんにあづけておけば、ちやんこ使ひ道を教へて下さるんだからね」

だが、ハイディはそんなこごくらんで、その優

しい思ひ付きを止める氣はなく、うれしさうに何度も何度も叫びながら、なほも部屋ぢうを跳びまはるのだつた。

「これからはおばあさんが、毎日く白パンが食べられる。そしたら又すつかり丈夫になつて——ああ、おばあさん」

急に又、うれしくつてたまらないこを思ひ付いた様子で、

「おばあさんが丈夫になつたら、又眼が見えるやうになるわね。そこいらぢうが暗いのは、弱つてるからなのねえ」

おばあさんは黙つてゐた。こんなにもやさしい心の子供の、こんなにも喜んでゐるのを傷つけたくなかつたので、ハイディは跳んであるいてるうち、ふこおばあさんの古い讚美歌の本を見つけた。するこ、又うれしい考へが浮んだ。

「おばあさん、わたし、もう字を讀んだり書いたりするこも出来るのよ。讚美歌を讀んであげませうか」

「ああ讀んでおくれ」

おばあさんは喜んで、でもびつくりしながら云つた。

「だけきお前さん、ほんたうに讀めるのかね」

ハイディはもう椅子にのぼつて本を取りおろしてゐた。夥しい埃だつた。長い間手をふれるものもなく、棚の上におきつばなしにされてゐたのである。ハイディは埃を拂つて、おばあさんのそばの腰掛けに腰をおろし、それを讀まうかきつた。

「それでも結構、お前さんの好きなのを」

おばあさんは糸車をわきへ押しやつて、一生懸命にハイディの讀み出すのを待つてゐた。ハイディはペーヂを繰りながら、あちこち一二行づつ口ずさんでゐたが、

「ああ、これがいいわね、おばあさん。お日様のうたよ」

そしてハイディは讀み出した。讀んで行くにつれ、ますます力をこめながら――

朝は來ぬ

ほのぼののかがやかに  
金色の陽をあびて

地はしづかなり

曉は夜の雲を拂ひぬ

神のみわざ

四方に滿つ

小さきものも偉いなるも

こそごまぐみわざを讀ふ

神の愛 滿ち足りぬ隈ぞなき

ものは去れど

神のみは永久

つよき力もて

御旨なし給ふ

渝らぬは御旨、つよきは御旨

みすくひは

さにかはらじ

悲しみに 戦きに

胸くづるこも

終ひの勝利は御旨なり

よろこびは

樂園にて

あらし果てていこふ時――

やすらかに待たむ

神の御世こそ此上なけれ

おばあさんは手を組み合はせ、之もいはれぬよろこびを顔ぢうにみなぎらせて聴き入つた。涙がぼろぼろと頬を傳つてゐたけれど、おばあさんのこんなうれしさを顔で、ハイディは今までに見たことがなかつた。ハイディが讀み終るまで、

「もう一度、お願ひだから、もう一度だけ、聞かせておくれ」

一生懸命にたのむのだつた。ハイディもおばあさんと同じ位うれしくなつて、繰返して讀んだ。

よろこびは

みその  
樂園にて

あらし果てていこふ時——

やすらかに待たむ

神の御世こそ此上なけれ

「ああ、ハイディちゃん、お蔭で心がすうつと明るくなつたよ。ありがたうよ、ありがたうよ」

おばあさんは何度も何度もうれしさに云つ

た。ハイディはすつかりうれしくなつて、今までとはまるで違ふその晴れ晴れと輝くおばあさんの顔を、いつまでもいつまでも見つめてゐた。もはや心配もなく、すでに心の眼では天國の樂園を、晴れ晴れとながめてゐるやうな、喜びと平和にあふれた顔だつた。

誰かが窓を叩いたので、ハイディが行つて見るまで、おちいさんが迎ひに来て手招いてゐるのだつた。ハイディは、これからも、もしベータールミ山へ行くにしても、半日だけにして歸つて来て、きつとおばあさんのところへ遊びに来る約束した。自分が来ればおばあさんを樂しませ、元氣づけるのだといふことが、ハイディには何よりもうれしく、お日様のきらめく山で、花や山羊たちが遊ぶよりも、もつと楽しい氣がした。ハイディが歸らうとするまで、ブリギッタが昨日ハイディがおいで行つた著作ミ帽子を持つて来た。ハイディは思ひ直して著作だけは腕にかけて持つて歸つたが、帽子はさうしても取らなかつた。道々ハイディは夢中になつて、おばあさんの家での話をした。お金さへ持つて行けば、デルフリにも白パンを賣つてゐるまで、おばあさんがみんなにめきめき

元氣に晴れやかになつたか、さいふこまなき。それから又パンの話にかへり、

「おばあさんが、さうしてもお金を取つてくれなかつたら、おちいさん、わたしにあのお金をみんな頂戴ね。そしたらわたし、毎日一つづつ、日曜日には二つ、買ふだけのお金を、ペーテルにやるの」

「ぢやが、寢臺はさうするかね。ちやんとした寢臺は買つておいた方がよいぞ。それでもパンが十分買へるだけは餘るがね」

だがハイディは、あの枯草の寢臺の方が、フラシクフルトのきれいな枕のついた立派な寢臺よりも、すつこよく眠れるからと、一生懸命にせがみ立て、たうさうおちいさんを承知させてしまつた。

「まあ金はお前のものぢやから、好きなやうにするがいいさ。あれだけあれば、おばさんのパンなら、何年間も買へるぞ」

ハイディはおばあさんがこの先きもう二度と黒パンを食べなくてもすむと思ふに、聲をあげて悦んだ。

「ねえおぢいさん、なにもかも、せんよりかすつこよくなつたわね！」

そして、おぢいさんの手を引つ張りながら、小鳥のやうにはしやいで、歌をうたつたり、跳びはねたりした。だが、ふと急に靜かになつて、云ひ出した。

「でも、神様があの時わたしが祈りした通りに、すぐ歸らせて下さつてゐたら、こんないいこまはなかつたのだわ。おばあさんにはパンをちよつぱりしか持つて来て上げられなかつたのだし、わたしはまだ字が讀めなかつたから、おばあさんをあんなに喜ばせて上げるこまも出来なかつたのだわ。神様は、わたしよりもすつこよく分つていらしつて、なにもかもよくして下さつたのね。みんな、クララのおばあさまの仰しやつた通りになつたわ。ほんたうに、神様がわたしがはじめ、泣いてお祈りした通りにして下さらなくつてよかつたこま！ これからも、おばあさまのおつしやつた通り、すつこ神様にお祈りして、お禮を申し上げるわ。もしか神様がお願ひを叶へて下さらなかつたら、これはフラシクフルトの時みたいなんだ、神様はあまできつこ、もつこもつこいこまをして下さるんだつて、自分に云つてきかせらわ。ねえおぢいさん、毎日お祈りしませうね。そして

決して神様を忘れないやうにしませうね。でない  
と、神様もわたしたちのこゝを忘れておしまひに  
なるわ」

「神様を忘れると、さうなるのぢやね」

おぢいさんは低い聲で云つた。

「そしたら、なにもかもめちやめちやになるの  
よ。神様はその人を勝手にさせてごらんになるの。  
さうすると、その人は貧乏になつておぢぶれて泣  
き出すのだけれど、よその人は誰もかまつてくれ  
ないで、お前は神様から逃げ出したんぢやないか、  
逃げなければ神様は助けて下さるのに、逃げるも  
んだから、さうやつて勝手にさせてお置きになる  
んだよ、つて云ふのよ」

「ほんたうにさうぢや。ハイディ、お前はごこで  
そんなこゝを習つたのぢや」

「クララのおばあさまからよ。おばあさまは、な  
にもかもようくわかるやうに、お話しして下さつ  
たわ」

おぢいさんはしばらく黙り込んで歩いてゐた  
が、やがて自分の考へをたゞりたゞり云つた。

「ぢやが、一たんさうなつてしまへば、もうおし  
まひぢや。引きかへすこゝは出来ない。神様から

見棄てられたものは、永久に見棄てられたのぢや」  
「ちがふわよ、おぢいさん、引きかへせてよ。お  
ばあさまだつてさう仰しやつたし、わたしのこゝ本  
の美しいお話にも書いてあつてよ。——あら、お  
ぢいさんにまだあのお話、してあげなかつたのね。  
早くおうちへ歸つて、わたしすぐ讀んであげるわ。  
さつても美しいお話よ！」

ハイディは少しも早く歸らうと、けはしい坂道  
を大急ぎで駆けのぼり、頂上に著くさぶいさおぢ  
いさんの手を放して小屋に駆け込んだ。おぢいさ  
んは、ハイディの鞆があんまり重いので、中のも  
のを少し取り分けて入れて来た籠を、肩からおろ  
した。それから腰かけて、もの思ひに耽けりはじ  
めた。

ハイディは本をかかえて飛んで来た。

「ああ、それでいいわ、おぢいさん」

ハイディはおぢいさんがちやんこ腰をかけたて  
るのを見るに、かう叫びながら、自分もそばにか  
け、早速本を開くに、しよつちうそこばかり讀む  
ので、ひさりでにそのお話のこゝろが開いた。主  
人公によせた深い同情を、聲にも調子にもあらは  
しながら、ハイディは讀み出した——。



「羊飼ひの息子がありません。毎日お父さんの羊を牧場に連れ出して番をしながら、楽しく暮らしてました。この繪はその息子が、身なりも小さくつばりミ、牧場に立つて、羊飼ひの持つ杖にもたれながら、美しい夕陽をながめてゐるころです。ところがこの息子は、急に自分の財産の分け前が欲しくなり、お父さんにせがんで分けてもらひ、都會に出かけ、間もなくすつかり使ひはたしてしまひます。おちぶれて、ある貧乏な百姓の下男になります。その百姓は、羊も畑もなく、豚だけしか持つてゐません。息子は豚の番人になりました。ぼろぼろの著物をまきひ、食べ物ミ云つても豚の食べる豆莢しかなく、急に家になつかしく、やさしいお父さんが戀ひしくなつて、自分の恩知らずが悔まれます。息子は泣きながら考へました。お父さんのころへ歸つて、『お父さん、わたしはもう息子ミ呼んでいただくねうちはありませんが、さうかせめて下男にして下さい』云はう、ミ。そして息子が歸つて來ますミ、お父さんは遠くの方からそれを見付けて——」

「ここまで來るミ、ハイディは急に讀み止めて云つた。」

「おぢいさん、それからさうなると思つて?——お父さんはまだ怒つてゐて、『それ見たこゝか!』ミ云つたと思つて? まあ次ぎを聞いていらつしやい」

